

23 真玉橋の人柱（イ） まだんばし

あの橋はね、造つても造つてもあれ、首里からずうつと伝えて流れる川だからね。あれは水がひどいわけさね。造つても造つても流れるもんだからね、昔の、大昔の話よ。大工さんがね。造つても造つても流れるもんだから、

「もう、この橋は造つてもね、なかなか、架けよう思うても架からんから、七色ムーティの女の人が、紐、入髪いりがんちゆうたら髪を大きくするために、大きくするためにこれいくつか紐で括つて、それ入れてあるわけさね。だから、そのね、その七色のね、紐を括つた髪をしている人を犠牲いけにえにしたらどうか」ちゆう話が出たわけさ。ほんで、いえば沖縄の端から端まで、国頭から島尻まで探してもいないわけね。

そしたらあの、いくら探してもいないもんだから、いないで。たった一人残ったって、棟梁の奥さんが。それは言つた人が棟梁だからね、棟梁が言うてるから

その棟梁が、奥さんが一人残っているわけだ。その人の髪を外して検査したら当たっているわけさ。その人が七色の紐括つた。それは方言ではね、七色ムーティちゆうわけ。

それでその人がなつて。それからね、女の子がいたつて。娘さんが生まれていたつて。お母さんが死ぬ前に、

「自分は犠牲に行くから、行く前に娘に伝えるがね。あんたはね、どこに行つても人先に口から話は出さなよ、もの言うなよ」つて。この人先に口から出たもんだから、自分のお父さんが出たもんだから、自分が当たっているでしょう。だから、

「人先に口からものは言うな、話はするな」つて、お母さんに言い伝えられて。そんで、お母さんは犠牲になつてもうたさね。

そんで、それから娘は大人になつても口はきけないわけさ。話が出来ないさ。言うなつて言われているから、もう無言になつて。別に話しないわけさね。そんな話。

それからね、ずっと偉いさん方がね、昔、王様時代

類話

でしょう。上の人が、あんまり顔もきれいいし、これ嫁さんにしたいって。で、その、嫁さんにしたいけれど、そのお父さんがね、自分の息子に、口の聞かんそんな嫁さんは貰わんで。そんでね、そしたらね、そのいっしょになる主人がね、

「じゃあ、その娘がね、一言でもしゃべったら許してくれるか」って親にお願いしたわけさね。そんなら親はそれオーケーしてるわけさね。そんで、何とか話しそうになって。二人いっしょになりたいからね、

「何とか一言、何でもいいからちよつとだけでもいいから一言話して話して」って、一生懸命して。やつとそれで話して、話が出たて。

「あのね、私はね、親がこうこうで、親に遺言で止められたもんだから、私は全然話を出来なかつたけれど、あんたといっしょになるあれだから、一生懸命、喉を撫でながら一生懸命涙をこぼしながら話したら出来るようになった」ちゅう。真玉橋よ。

字糸満

稲嶺盛亀

字武富

長嶺陽元、大城トミ

字照屋

上江洲由豊

字真栄平

喜納力メ、金城 苗

字新垣

宮里栄吉

南波平

伊集スエ

字伊原

上原孝助

字東里上里区

下田ミツ